‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

89号 1994.7.4
文・編集・発行
恋 怪子

LIVE：眼球駆楽舞 1994.5.31,6.25 高円寺屋根裏II

眼球駆楽舞のライブでヒデロウの歌を聴いていると、「ヒデロウ」という一人の独自な人間としての存在の真実性が迫ってくる。『お前を眠らす』で「俺は真実だ」と歌っているが、歌に歌われていることはヒデロウの真実である。それがわかる。そういう歌を聴くと、それが「あなたが無かったと仮定してみて／舞台では以前と同様／苦い顔を吠え続ける」ということであっても、やはり真実であるから、聴く者の存在もまた真実になる。『音に出来たら歩く』に歌われている「独立した肉体」と「独立した精神」を持ち、「無意の知識でそらす」ことも、「知識で馬鹿をさらす」こともしないでいられる。「皆様の馬鹿と俺の馬鹿」を始めないでいられる。自分の輪郭がくっきりとして、いつもはほとんど感じないですごしている外界との境界である皮膚がヒリヒリしてくる。そして、そこにあるのはゆたかな沈黙である。その沈黙の中で己の真実と向かい合っていると、おだやかに憩っていられる。すきあらば私の中の真実という血を吸いとろうとする吸血鬼のような外界に直立していられる。これは、肉声で歌われ、すばらしい演奏という背景（ヒデロウ自身が演奏は詩の背景であると語ったことがある）をもった詩の力が最大限にはたらいているからであろう。

デモ・テープ（Y200）が出たので、いままで歌詞が聞き取れなかったところもよくわかって、ヒデローの現実認識のすごさがクリアーに伝わってくる。

『お前を眠らす』

お前が何を言おうと　誰かが罵ろうと
この詩に　この音　この様
これが俺の顔で体だから　これが俺の顔で表だから
お前はもう眠れ　お前はもう眠れ
この詩も　この音も　この場も　忘れろ
愚ふざけの　息を消せ　空威張りの　人を焼け
今行くぞ　俺は走る　止まらずに
何時までも何処までも走り続けて
お前を眠らす
お前の目には俺が不様に映っても
この詩に　この音　この様
これが俺の顔で体だから　これが俺の顔で表だから
お前を何時か　俺が　眠らす
この詩も　この音も　この場も　忘れろ
愚ふざけの　息を消せ　空威張りの空威張りの　人を焼け
今行くぞ　俺は走る　止まらずに
刺されても刺されても走り続けて
お前等を眠らしてやる
ここに俺が居る為に　ここに俺が有る為に
俺は真実だ　お前を眠らす　必ず

『音に出来たら歩く』

この空気は常に苦である　この匂いは常に無である
人・人・人で俺も人　弱い人だとされるだけ
そんな苦い顔でもって気が付いてみたらベッドの上
毎日打たれる点滴の流れを見つつ　時々思い出した
ここを出たらまた始まる　皆様の馬鹿と俺の馬鹿が
毎日先へ歩く　泥にまみれて歩く
からまる糸は閉ざす　無為の自分を保つ
気付かぬ理性に騙された　気付かぬ意識の行くえは何処に
頭を転がし　頭に遮がれ　一段上から俺を叩く
近づいてくる不解な行進は独立した肉体を持ちながら独立した
精神を持たず　その中でうろうろする行進は　その中でしか
踊らぬ行進は見慣れないものに常に依えて　知識でもって
都合のいい結果を無理矢理に引き出す
無意の知識でそらす　知識で馬鹿をさらす
下手な汚れはさける　何時も手袋はめる
そんな俺の顔気が付いてみたらベッドの上
有る筈の無い肉体を知る　誰に見せても見えない筈だった
俺の影　和らげたのはあなたの瞳界
これは俺にとって恐ろしい程の奇跡な訳で　あなたが無かったと
仮定してみて　舞台では以前と同様　苦い顔を苦い顔を吠え続ける
罵った夜は走る　唄い唄で走る
高まる風に駆く　波の度合で深く
腹の立つ日は走る　音に出来たら歩く
軍隊蟻に苦く　何時も自分を歌う

デモ・テープと6／25に配られたチラシに描いてある絵
ごはんをパクついているのがV、シャモジをもっているのがG、
牛乳を飲んでいるのがB、タバコを吸っているのがD

LIVE：白痴 1994.5.10下北沢屋根裏 5.21,6.6 高円寺屋根裏II

photo by k.k.

3月3日屋根裏IIに眼球駆楽舞を見にいったときに白痴を初めて見た。ヴォーカルがとても印象的だった。この後のライブはギターの人が交通事故にあったとかで、サポートが入るときもあったが、それ以外はヴォーカルの人がギターも弾いている。

白痴のライブにはいつも緊迫感と静寂があって、美しい。「美しさ」って具象じゃなくて、抽象なのだって強く思う。具象としてももちろん美しいのだろうけれども、具象から離れていったものの美しさには、永遠の気配がある。透明で細くて壊れそうな感じのヴォーカルの高音に、うねうねとしたヘヴィなベースの低音がからみあって独特の世界が現れ、バシッとしたドラムがその世界の輪郭をクリアーにする。下に載せた「『夢』今だ覚めず」も好きな歌だけど、「伯爵の砂時計は回る回る／千の兵隊を引き連れて／誰思う南へ馬は走る／絶望の果てとも気付かずに…」という歌詞の「伯爵の砂時計」がいちばん白痴らしい感じがして好きな歌である。

『夢』今だ覚めず　作詞 小沢犬咲 作曲 石井気陰

※私の記憶の儚かな儚かな人達の名前は
灯りを消すたび一つ一つずつ
きれいに消えてゆく

幸福な暮らしをしてる人や
貧困な暮らしの人達
一度でも笑ったことがあるなら
それだけで幸せと思へ

純粋な者は近頃淋しくあまり口をきかず
架空のあなたに憧れながら夢今だに覚めず

*汚れた心を望むなら
教えてあげます生き方を
代わりに正しい生き方を
あなたに教えてもらいます

※repeat
*repeat
*repeat

私に正しい生き方を

WORDS：佐野元春（びあ6月14日号より）

「『人生の中で追求しているのは、ある夢の実現。でもそれも、人に話せば他愛のないものなのかもしれない。とても仲のいい友達が周りに何人かいて、みんなで同じ景色を見て感動して、同じことに傷つく。するとそこで育まれる絆がある。その絆を大切にするという価値観がグループの中で生まれ、そこから生まれる音楽なら何か価値があるのではないかという前提を思い描きながらTHE HEARTLAND をやってきた。そしてそれを永遠に続けられたらどんなに素敵だろう、というのがぼくの夢だった。でも今回の解散は、ぼくのある時期においてのロックンロール理想主義の終焉なんだろうな。10代や20代の前半で見た夢は、誰でもいつしか終わってしまう。自分だけは違うという意地があった。けれどもいつかは終わりを迎えるのが自然の摂理だと、今はそう思う』

先日自らの手で他界したカート・コバーン（ニルヴァーナ）の遺書の一部を彼に読んでもらい、その感想をたずねた。ロック・スターとして、あるいは人間としての偽善に耐えられなくなったカート・コバーンの告白を、同業者の佐野元春ならどう答えるのか興味があった。

『…… ここにもひとつのロックンロールの理想があるね。けれどもカート・コバーンが誰にでも許される自由の中から自殺という形態を選んで、しかも最後にこの文面を残したとしたら余りに一方的だ。フェアじゃない。もしも彼が35歳まで生きていたとしたら、個人の歴史の中である種の理想主義の終焉を迎えた後の彼の音楽を、ぼくは聴きたかったな』

柔らかな心でくるんだ、それは正しく大人の意見である。たとえ国は違っていても、同じ職業を14年間続けている人間ならではの説得力がある」

文・長谷川博一

「ロックンロール理想主義の終焉」とか「いつかは終わりを迎えるのが自然の摂理だ」とか、言葉がおおげさな分だけ中味の貧弱さをさらしている。カート・コバーンの自殺とその遺書についても「余りに一方的だ。フェアじゃない」とか、「もしも彼が35歳まで生きていたとしたら、（中略）彼の音楽を、ぼくは聴きたかったな」とか、まったくまぬけでおめでたい。一人一人の人間にとって、生きることも死ぬことも常に一方的だし、リアルなことだ。ゲームなんかじゃない。なにもわからない他人（オマエ）が、フェアだとかアンフェアだとか、わかったふうなことをいうことじゃない。聞き手の長谷川博一も「国が違っても同じ職業を14年間続けている人間ならではの説得力がある」などと。どこが同じなんだ？

「しかし、彼は三十七歳で死んだ。自分自身の手によって、それは絵を描いていた手だった。ひどい話だ。自分に忠実に生きるためには、絵を描き…そして自殺せねばならない羽目に陥ったのだ。ひどい話だ。あの受刑者のような人生、その支配する論理（彼の論理ではない）に従う拷問は、その論理によれば、常にフィンセントは間違っているのだ。絶えず的をはずしていることになる。ひどい話だ。現在でもなお、彼の論理や不器用さ、それによって生じる失敗を認めようとはせずに、彼の作品を称賛することは、なぜだろう。そして、そこを出発点として、人々はそういった彼を受け入れてしまい、彼に関するもっともひどい伝説をうけいれてしまっている。ひどい話だ。一人の死体の模倣以外の人間になろうとするためには、ファン・ゴッホのような作品を創作しなければならなかった。それほどまで困難なことを為しとげ、あれほどまでに非常識なやりくりをしなければならなかった。生は存在するのだという証拠を死の向こう側に、生の向こう側に追いつめて捕えなくてはならなかった。それも自分を守るために、生きることが禁じられた社会を遮るために。そういう社会では、たとえ生きることができても、その終着は美術館となっている。そこに辿りつくまでには大虐殺がある。ひどい話だ。もっとも自然なものを得るために、つまり生をじかに生きることは、当然であり平和をもたらすはずであるのに、あれほどまでの情熱が必要とされなければならなかった。またそのくらい簡単なことが、恍惚や苦悶、そして繰り返すようだが、創作というものに変質してしまわなければならなかった。創作が儲かるものであれば、たまたま得をした浮かれ者たちは、今度は墓の中にいってしまったその『落伍者』に拍手を送る。」

——— ヴィヴィアンヌ・フォレステール
「人間ゴッホ——変伽の挽歌」より